

從職業作家的視點來看「二位國民作家」漱石與村上春樹

曾 秋桂

淡江大學日本語文學系 教授

摘要

本論文主要是考察被稱為「二位國民作家」之漱石與村上春樹，兩人所擁有的職業小說家之意識差異性。具體以村上春樹之《職業としての小説家》(2015)與《漱石全集》第11卷、《漱石全集》第16卷當作文本，從評論家・評論、講演活動、文學獎、職業作家之意識、讀者等5個面向，仔細進行考察、分析。

考察結果顯示評論家・評論、講演活動兩個面向上，漱石跟村上春樹一樣採取消極的態度。但當進入朝日新聞社後，漱石變得積極從事評論家・評論、講演活動等社會活動。又漱石對文學獎的權威象徵，自始至終採取斷然拒絕的姿態。而村上春樹則持以與其談文學賞獲獎之類，倒不如閱讀書籍、從事創作更具意義之論調。再者於職業作家之意識、讀者兩個面向上，兩人多少有些共同點。然而兩人在看待讀者的視線之位置是不同的。此反映出漱石與村上春樹兩人所生存時代背景之不同。

話雖如此，超越時代鴻溝的兩人，所擁有的職業作家之意識，仍有許多雷同之處。由此可見漱石文學是村上春樹永遠憧憬的標竿，愛慕之對象。

關鍵字：「二位國民作家」 職業作家 意識 異同 永遠憧憬的標竿

"Two national writers" as a professional writer;**Natsume Soseki and Murakami Haruki**

Tseng, Chiu-kuei

Professor, Tamkang University, Taiwan

Abstract

This paper aims at investigation of the writer consciousness which Soseki and Murakami Haruki called "two national writers" have.

As a result of considering, in two points of criticism and a lecture, Soseki had taken the negative attitude which is seldom different from Haruki Murakami. However, Soseki came to perform criticism and a lecture positively after entrance into Asahi Shimbun. Moreover, Soseki had refused authoritarianism, such as a literary award.

On the other hand, Murakami Haruki says that reading and the writing are more important than a literary award. And the common feature of Murakami Haruki and Soseki is also seen about two points of the correspondence to professional writer consciousness and a reader. However, the difference in the position of eyes to readers shows a difference of Soseki and Murakami Haruki era.

The consciousness as both professional writer has many common features over the frame of time. From these points, a figure of Murakami Haruki who makes Soseki literature his immortal admiration is seen definitely.

Keywords: "Two national writers", professional writer, consciousness, common feature and difference, admiration immortality

職業作家の視点から見た「二人の国民作家」

漱石と村上春樹

曾 秋桂

淡江大学日本語文学科 教授

要旨

本論文は、「二人の国民作家」と呼ばれた漱石と村上春樹の持つ、作家を職業とする意識の究明を目的としたものである。村上春樹『職業としての小説家』（2015）と、『漱石全集』第11巻、『漱石全集』第16巻を資料とし、評論、講演、文学賞、職業作家意識、読者への対応の5点に分けて、「二人の国民作家」の異同の探求を進めた。

考察した結果、評論、講演の2点では、漱石は村上春樹とあまり変わらない消極的態度を採っていたが、朝日新聞社入社後、積極的に行うようになっていく。また文学賞などの権威を盾にしたシンボルを、漱石は断じて拒絶する姿勢を見せた。一方、村上春樹は文学賞よりも読書・執筆の方が大事だと述べている。そして、職業作家意識、読者への対応の2点については、多少相通じた点が見られる。ただし、読者への目線の位置の違いからは、漱石と村上春樹の両者が生きた時代の相違を覗くことが出来る。

とはいえ、時代の枠を超えて、両者の職業作家としての意識は一致している点が多い。そこからは、漱石文学を自分の永遠なる憧れにし、愛慕しつつある村上春樹の姿がくっきりと見られる。

キーワード：「二人の国民作家」、職業作家、意識、異同、
永遠なる憧れ

職業作家の視点から見た「二人の国民作家」

漱石と村上春樹

曾 秋桂

淡江大学日本語文学系 教授

1. はじめに

1987年に刊行した『ノルウェイの森』の絶好の売れ行きを契機に、村上春樹は「現代の漱石である」という宣伝文句¹で商業的に呼ばれるようになった。2011年に至って、研究面で漱石と村上春樹を「二人の国民作家」とする柴田勝二の説²がようやく登場した。無論、柴田勝二の説が出る前から、漱石と関係づけて村上文学を考える村上春樹研究³の動向は既にあり、その後も盛に論じられている⁴。ただし、「二人の国民作家」で漱石と村上春樹をひと括りに呼んだ柴田勝二の説は、確かに画期的である。

2015年に刊行された村上春樹の最新エッセイ『職業としての小説家』では、漱石は手本として取り上げられた只一人の日本人作家で

¹ 当時漱石専攻のために、広島大学留学中だった論者は、それを聞いて受け入れ難かった。

² 柴田勝二(2011)『村上春樹と夏目漱石—二人の国民作家が描いた<日本>』祥伝社 P4 では、「国民の意識や関心を強く集めた時流のなかに身を置き、その流れが沈静化して人々を巻きこむ力を失っていく過程でその出発や成熟を遂げていった作家」と規定している。

³ 佐藤泰正(2001)「村上春樹と漱石—<漱石の主題>を軸として」『日本文学研究』36号梅光女学院大学文学部、山根由美恵(2007)「『蝨』に見る三角関係の構図—村上春樹の対漱石意識」『国文学攷』195号広島大学国語国文学会、半田淳子(2007)『村上春樹、夏目漱石と出会う—日本のモダン・ポストモダン』若草書房、小森陽一、ルービン・ジェイ(2010)「対談『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』65巻7号講談社などである。

⁴ 例えば、曾秋桂(2012)「『1Q84』における記憶再生の装置—漱石の『三四郎』を原型として—」『台湾日本語学会学報』32号 P21-40 台湾日本語学会、北村隆志(2014)「村上春樹『女のいない男たち』と夏目漱石」『民主文学』日本民主主義文学会 11号、曾秋桂(2015)「村上春樹の男嫉妬物語「木野」の蛇の持つ「両義性」—重層物語世界の構築へ向けて—」『台湾日本語学会学報』38号 P25-48 台湾日本語学会、曾秋桂(2016)「男の嫉妬物語を視点に見た夏目漱石と村上春樹—「木野」における「両義性」から示唆されつつ—」森正人監修小森陽一・曾秋桂編『村上春樹研究叢書村上春樹における両義性』第三輯 P109-138 淡江大学出版中心

ある⁵。今までの村上春樹の漱石に関する発言から分かるように、漱石文学は面白く、漱石を好きな日本作家とし、よく『三四郎』に触れている⁶。そして、小説『スプートニクの恋人』(1999)以後、頻繁に漱石の小説の名前をそのまま登場させている。よく言及された『三四郎』をオマージュとして、『1Q84』(2009-2010)に変換したことも既に指摘された⁷。このように、村上春樹文学を研究する上で、漱石との関係の究明は避けては通れない課題の1つだと言えよう。

そこで、本論文では、小説家を本業とした二人の国民作家の作家意識などについて分析、対照を試みたい。尚、比較対照するに当たり、『職業としての小説家』、『漱石全集』第11巻、『漱石全集』第16巻をテキストとして取り上げる。村上春樹自身が『職業としての小説家』を「語られざる講演録」⁸、「私的講演録」⁹と自認し、「僕としては、自分が小説家としてどのような道を、どのような思いをもってこれまで歩んできたかを、できるだけ具象的に、実際的に書き留

⁵ 村上春樹(2015)『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P87では、「漱石やヘミングウェイの文体は、日本人の、あるいはアメリカ人のサイキの一部として組み込まれている」と高く評価している。嘗て吉本隆明も漱石の文体を「近代日本語の一つの達成」(「漱石の巨きさ」(2004)特別増刊『夏目漱石と明治日本文芸春秋』第82巻第16号 P50 文芸春秋)とし、山田有策が「文体の魔術師」(「文体の魔術師」(2004)特別増刊『夏目漱石と明治日本文芸春秋』第82巻第16号 P20 文芸春秋)と見ている。そして当書 P223では、「日本の小説でいえば、夏目漱石の小説に出てくる人々も実に多彩で、魅力的です」と褒めている。

⁶ <http://paper.wenweipo.com/2008/11/17/OT0811170005.htm>「葉蕙によるインタビュー」2008年10月29日(2015年5月16日閲覧)、松家仁之によるロングインタビュー(2010)「特集 村上春樹ロングインタビュー」『考える人』N033 新潮社、<http://www.douban.com/group/topic/37861034>「村上春樹 公開インタビュー in 京都」2013年5月6日(2015年5月16日閲覧)、<http://www.wellneednt.com>「村上さんのところ」2015年2月15日では、「村上春樹が現代の夏目漱石である」(2015年5月16日閲覧)。ただし、ジェイ・ルービンが2015年10月30日に台湾・淡江大学で「村上春樹から小説『日々の光』まで」を題に行った講演(曾秋桂編『淡江大学村上春樹研究中心成立周年記念演講會議手冊』収録、淡江大学村上春樹研究センター発行)、「村上春樹は、漱石の全小説の中で『坑夫』が一番好きな作品だと云いました」(P11)と指摘している。

⁷ 曾秋桂(2012)『1Q84』における記憶再生の装置—漱石の『三四郎』を原型として—『台湾日本語文学学会学報』32号 P21-P40 台湾日本語文学学会

⁸ 村上春樹(2015)「あとがき」『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P310

⁹ 村上春樹(2015)「あとがき」『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P310

めておきたい」¹⁰と規定したからである。また、対照研究に取上げた漱石に関しては、『漱石全集』第11巻、『漱石全集』第16巻に消息や評論、講演等が収録され、作家像が窺われるためである。なお、『漱石全集』からの引用文にある旧漢字、旧仮名遣いは、当用漢字、現代仮名遣いに改めることにする。

2. 『職業としての小説家』と『漱石全集』第11巻、第16巻についての説明

二人の国民作家の意識の対照研究にあたり、論究を展開する順番を、『職業としての小説家』から『漱石全集』第11巻、第16巻へ遡及することにする。

2.1 村上春樹『職業としての小説家』に収録された12篇の概略

村上春樹が自発的に記した¹¹『職業としての小説家』には、「小説家は寛容な人種なのか」、「小説家になった頃」、「文学賞について」、「オリジナリティについて」、「さて、何を書けばいいのか?」、「時間を味方につける——長編小説を書くこと」、「どこまでも個人的でフィジカルな営み」、「学校について」、「どんな人物を登場させようか?」、「誰のために書くのか?」、「海外へ出て行く。新しいフロンティア」、「物語のあるところ、河合隼雄先生の思い出」の12篇が収録されている¹²。その中で、福島原発爆発事故をめぐって嘗てない社

¹⁰ 村上春樹(2015)「あとがき」『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P311

¹¹ 村上春樹(2015)「あとがき」『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P308「自分が小説を書くことについて、こうして小説家として小説を書き続けている状況について、まとめて何かを語っておきたいという気持ちは前からあり、(中略)最初から自発的に、いわば自分自身のために書き始めた文章」とある。

¹² 村上春樹(2015)「あとがき」『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング P310-P311では、「最初の六章ぶんが「Monkey」に毎号掲載されることになった。机の中に眠っていたものを毎号渡すだけだったので、これは実のところ格段に楽な仕事だった。章は全部で十一章ぶんあったので、前半の六章は雑誌連載、後半の五章は書き下ろし収録ということになった。そこに河合隼雄先生についての講演原稿を付け加え、全部で十二章の構成になった」とその経緯が説

会・教育システムへの強烈な批判が見られる「学校について」1篇は、異色である一方、村上春樹が東日本大震災(通称 311)以後抱いている日本社会へのコミットメント志向を見極める上で見逃せない大事な1篇でもある。そして、最初の3篇は村上春樹の小説家という職業に関する情報、職業小説家になった経緯、小説懸賞ないしノーベル文学賞について触れたものである。「オリジナリティーについて」、「さて、何を書けばいいのか?」、「時間を味方につける——長編小説を書くこと」、「どこまでも個人的でフィジカルな営み」の4篇は、主に小説をどのように書いてきたかその経験を踏まえた上の具体的記述である。その後続く「どんな人物を登場させようか?」、「誰のために書くのか?」の2篇に、小説創作を通じた村上春樹の自己主張が見られる。残りの「海外へ出て行く。新しいフロンティア」、「物語のあるところ、河合隼雄先生の思い出」の2篇では、アメリカで翻訳された村上春樹作品の状況、知人、日本の心理学者との交流が述べられている。

2.2 『漱石全集』第11巻、第16巻に収録された評論、雑篇、序文、講義、談話

『漱石全集』第11巻、第16巻には、評論(38篇)、雑篇(17篇)、序文(43篇)、雑感(3篇)、講義(1篇)、講演(5篇)、談話(85篇)、補遺(3篇)、蔵書目録(1篇)が数多く集められており、主に漱石の文芸に関する所見が見られる。

3. 二人の国民作家の異同(1) — 評論家・評論、講演活動について

上掲のテキストに収録された作品から読み取れた内容を比較分析した結果を以下、評論家・評論、講演活動、文学賞、職業作家としての意識、読者の5点に分けて纏めることにする。なお、纏めた内

明されている。

容の長さにより、便宜上、「二人の国民作家の異同」をさらに2節に分けて詳細に述べることにする。

3.1 評論家・評論について

評論家が行った評論に対して、漱石と村上春樹の両者は各自の見解を以下のように示している。

3.1.1 村上春樹の場合

『風の歌を聴け』(1979)によって、『群像』新人賞を獲得し、文壇の「入場券」(P60)を手に入れた村上春樹は、その後、『風の歌を聴け』(1979)、『1973年のピンボール』(1980)のどちらも芥川賞の「最有力候補」(P61)に挙げられたが、受賞しなかった。落選については、『村上春樹はなぜ芥川賞をとれなかったか』(P64)と言った他人の出版物と、「芥川賞というのはよほど魅力のある賞なのだろう。(中略)落ちて文壇から遠ざかる村上春樹さんのような作家がいるからますます権威のほどが示される」(P57)と皮肉を言われたことがある。文壇からの反応について、「僕が小説を書き始めたのは三十五年も前のことですが、その当時はよく「こんなものは小説じゃない」「こんなものは文学とはいえない」と先行する世代から厳しい批判を受けました」(P129、下線部分は論者による。以下同様。)と村上春樹は回想している。さらに、書き進んでいるうちに、「自分で納得のいくものが書けるようになっても、僕の作品に対する批判は弱まりはしなかった。いや、むしろますます風圧が強くなったようでした」(P94)と言い、「僕が書くものは、出来不出来にあまり関係なく、少なからぬ数の人々を終始「不快な気持ちにさせ続けてきた」ということになりそうです」(P95)と認識し、「業界を全体的にみれば「イエス」よりは「ノー」の声の方が圧倒的に大きかったと思います」(P94)と結論を出している。「この程度のもので文学だと思ってもらっては困

airiti

る」(P245)と言った「酷評」(P245)¹³を受けた村上春樹は、文芸評論家、評論に対しては、「少なくとも数の文芸評論家が、ある種の小説なり物語なりを理解できない——あるいは理解できたとしても、その理解を有効に言語化・理論化できない」(P21)と見ている。それと関連して、村上春樹は「僕がそんな身勝手な軸やものさしを持ち込んで、それに沿って他人の作品を評価したりしたら、された方はたまらないだろうという気がします。既に作家としての地位がある程度固まった人ならともかく、出たばかりの新人の作家の運命を、僕のバイアスのかかった世界観で左右するようなことは、おそろしくてとてもできない」(P73)、「僕が誰かの作品(候補作)を批判して、それに対して「じゃあ、そういうおまえの作品はどうなんだ?そんな偉そうなことを言える立場におまえはあるのか?」と問われると、僕としては返す言葉がなくなってしまう。実際にその人の言うとおりなんだから、できることならそういう目にはあいたくない」(P75)を理由に文学賞の選考委員の仕事は一切引き受けないことにした。選考委員を引き受けなかったことについて、「作家としての社会的責任の放棄にあたるじゃないかと言われれば、まあその通りかもしれません」(P73)と村上春樹は否定しないが、「作家にとって何より大事な責務は少しでも質の高い作品を書き続け、読者に提供することです」(P74)と自分の役目をしっかりと定めている。

3.1.2 漱石の場合

慎重に考慮をした末¹⁴、「文芸上の述作を生命とする余にとって是程難有い事はない、是程心持ちのよい待遇はない、是程名誉な職業はない」(「入社の際」P494)と公表した漱石は、明治40年4月から

¹³ 当書のP156-P157、P252にも、批判と似た記述が見られる。

¹⁴ 詳しくは、(1966・1976)『漱石全集』第14巻岩波書店P559-561にある、40年3月11日白仁三郎宛川書簡を参照

airiti

亡くなるまでの 10 年間、朝日新聞社の新聞小説家として生きた。漱石の朝日新聞社の入社は、「新聞小説史に新たなページをひらくことになった」¹⁵とされた。また、文芸に限らず広く学芸一般にわたる評論、随想、報告などを載せることを趣旨とした『朝日文芸欄』（明治 42. 11. 25-44. 10. 24）¹⁶を 2 年間近く漱石は担当した。そのことについては、「新聞近代化の一翼を担って、紙面の充実に寄与した。（中略）啓蒙の役割を果たし、漱石山脈の文化的指導性の確立を招来した」¹⁷とされた一方、新聞を公器に使い、「漱石一派の自然派攻撃の拠点」¹⁸になったという謗りも受けた。

入社する前の明治 40 年 1 月、「余は評家ではない」（「作物の批評」P19）と自認した漱石は、「作家は造物主である。造物主である以上は評家の予期するものばかりは拵えぬ」（「作物の批評」P18）と、評論家の既定観念により作家が作品を書いているわけではないと明確に指摘している。そして、評論家の持つべき態度を、「評家は自己の得意なる趣味に於て専門教師と同等の権力を有する得べきも、其縄張り以外の諸点に於ては知らぬ、わからぬと云い切るか、又は何事をも云わぬが礼であり、徳義である」（「作物の批評」P16）、「作家は身の状況と天下の形勢に応じて時々其立場を変えねばならん。評家も亦眼界を広くして必要な場合には作物に対する毎に其見地を改めねば活きた批評は出来ない」（「写生文」P28）としている。不勉強な評論家が行った評論については、「評家が従来読書及び先輩の薫陶、若くは自己の狭隘なる経験より出でたる一縷の細長き趣味中に含まるるもののみを見て真の文学だ、真の文学だと云う。余は之

¹⁵ 遠藤祐 「『朝日文芸欄』の主宰」（1994）『朝日新聞記者夏目漱石』P17 立風書店

¹⁶ 小宮豊隆（1966・1975）「解説」『漱石全集』第 11 巻岩波書店 P638-P639

¹⁷ 熊坂敦子 「編集者漱石の感覚——朝日新聞を中心に」（1994）『朝日新聞記者夏目漱石』P28 立風書店

¹⁸ 遠藤祐 「『朝日文芸欄』の主宰」（1994）『朝日新聞記者夏目漱石』P21 立風書店

airiti

を不快に思う」（「作物の批評」P19）と作家としての立場から強く反発している。最後に付けた「余の云うことは自己の作物の為でない事は明らかである。余はただ吾邦未来の文運の為に云うのである」（「作物の批評」P20）の付記から見ると、国家社会を視野に入れてこそこの漱石の発言だと見てよからう。

しかし、入社後の明治42年1月1日に、「私は実際の作物にあたって兎角の評をする事をしない」（「文壇の趨勢」P189）と言ったにも関わらず、同年9月5日に、「我々批評家はある好い加減な事を云って作家に媚びるよりも、自分の思ひ通りを作家の前に披瀝して、潔く罪を作家に得た方が自分に対しても作家に対しても義務のある所為と考える」（「額の男」を読む」P218）と、漱石は批評家を文壇の一員と認めた上、作家を支持する立場から逆転して、批評家を支持するようになった。これは決して漱石の豹変ではなく、漱石が入社前の個人の立場から、入社後社会と密接に関わる立場に立ってから見解を変えたと考えられる。ただし、喜ぶべきことに、最後一段落では、「余も批評やるが、創作もやる。此の「額の男」の批評中で移して余自身の小説の上に持って来て非難しても構わないものもあるかも知れない」（「額の男」を読む」P219）と、他人の作品に対する批判を自作にも応用できると反省している。

さらに、「朝日文芸欄」編集を担当後の明治43年2月、「小説の批評や議論が盛になるのは文芸界に住する一人として余の尤も喜ぶ所である」（「客観描写」と「印象描写」P233）と批評を肯定する態度を取るようになった。そして、明治44年の時点では、「御承知の通り、私は小説を書いたり批評を書いたり、大体文学の方に従事して居る為文芸の方のことをお話する傾きが多うございます」（「文芸と道徳」P367）と自認した小説家兼評論家の立場から見ても、「尤も権威のある魔は他人の評価である」（「文芸と道徳」P390）と言って、

airiti

評論家が行った批評が作家に対する殺傷力が大きいことを承知している。

ここで注意してはならないのは、漱石が朝日新聞社に入社する前に評論についての見方は、村上春樹とは大した変わりはないが、朝日新聞社入社を契機に、漱石が作家擁護から評論家擁護へと見解が変わり、さらに「朝日文芸欄」を担当後、その志向をますます強めていったということである。要するに、漱石の社会的境遇が変わることで、評論家を肯定するようになった¹⁹のである。ただし、入社前、前述の国家社会を視野に入れたことを合わせて考えてみると、漱石には根本的に国家社会、民衆への意識が強いと言えよう。一方、村上春樹は漱石の境遇、個性とは違い、また作家歴からも最初に評論に対して持ったネガティブな姿勢は変わっていない。

3.2 講演活動について

頼まれた講演について両者が持つ見解は以下の通りである。

3.2.1 村上春樹の場合

特別の場合ではない限り、村上春樹は、基本的に日本国内では講演を引き受けないことにしているのに対して、海外では日本国内と比べて、比較的に進んで講演などの依頼を引き受けることにしている。その理由は村上春樹が弁明した通り、「日本人作家としての責務」をある程度進んで引き受けなくてはならないという自覚をそれなりに持っているから」(P292)ということである。ちなみに、村上春樹が海外で行った講演、フランツ・カフカ賞受賞スピーチ(2006、10.30)、「壁と卵」(2009.2.15 エルサレム賞受賞スピーチ)、「非現実的な夢想家として」(2011.6.9 カタルーニャ国際賞受賞スピーチ)

¹⁹ 漱石が書いた評論、講演どを取り扱う場合、相原和邦が「文学論・文芸の哲学的基礎・作家の態度」(竹盛天雄編(1980)別冊国文学『夏目漱石必携』N05 學燈社)で「作者の自己批評に惑わされず、この論の可能性と限界とを十全に測定する必要がある」(P194)と示唆したように、注意深く読む心構えが必要であるが、時系列に読んでいくと、その変貌を把握することが出来る。

は、まだ記憶に新しく、村上春樹の国際的評価を高めている。

3.2.2 漱石の場合

入社後の漱石は「文芸の哲学的基礎」(明治40年5.4-6.4)で、「私はまだ演説ということ余り——余りではない殆ど遣ったことのない男で、頼まれた事は今迄大分ありましたけれどもみんな断って仕舞いました。どうも嫌なんですね」(P31)と述べ、村上春樹と同じく講演が嫌の筈であったが、入社後、「無論話すことさえあれば、何処へ行っても何を遣っても差し支えないはずですよ(「中味と形式」P344)と言い、「私は学会の講演は時々依頼を受けてやることがあります」(「中味と形式」P347)と変わった。周知のように、「中味と形式」は、修善寺大患後満1年の明治44年8月に大阪朝日新聞の要請に応じて、関西を旅行し講演した「道楽と職業」、「現代日本の開化」、「文芸と道徳」の一連の講演の1つである。後に講演原稿を加筆したものを朝日新聞社が『朝日講演集』として出版した²⁰。それに「創作家の態度」、「文芸の哲学的基礎」を加えて編んだ『社会と自分』にある「皆社会対自分の関係を研究したもの」²¹という記述からは、国家社会への意識の強い一面が窺われる。それに注目した遠藤祐は、それが漱石の「社会問題について発言し、小説の欠をおぎなうところがあつた」²²とも指摘している。

このように、もともと村上春樹と同じく講演が嫌いだった漱石は、入社後、頼まれて講演に応じてよく国内各地に出かけるようになった。これも前述の評論家・評論で触れたように漱石が常に国家社会を視野に入れて考えた結果だと言えよう。結局、漱石は、新メディア・新聞の社会的影響力を知り、自らもそれに乗って明治期の日本

²⁰ 小宮豊隆(1966・1975)「解説」『漱石全集』第11巻岩波書店 P639

²¹ (1966・1975)『漱石全集』第11巻岩波書店 P600

²² 遠藤祐「『朝日文芸欄』の主宰」(1994)『朝日新聞記者夏目漱石』P15 立風書店

airiti

にコミットメントしようとしていたと言えよう。

4. 二人の国民作家の異同(2)―文学賞、作家としての自負、読者について

第3節に引き続いて、夏目漱石と村上春樹の異同を見てみよう。

4.1 文学賞について

文壇で行った懸賞、文学賞について両者は各自の見解を示している。

4.1.1 村上春樹の場合

「最有力候補」(P61)に挙げられた『風の歌を聴け』(1979)、『1973年のピンボール』(1980)の芥川賞落選について、現時点の村上春樹は「とっでもとらなくてもどちらでもいいと考えていました」(P60)と書いている。小説家にとって入賞より更に根本的で大事な事として、「真の作家にとっては、文学賞なんかより大事なものがいくつもある」ということでしょう。そのひとつは自分が意味のあるものを生み出しているという手応えであり、もうひとつその意味を正当に評価してくれる読者が――数の多少はともかく――きちんとそこに存在するという手応えです。そのふたつの確かな手応えさえあれば、作家にとっては賞なんてどうでもいいものになってしまう。そんなものはあくまでも社会的な、あるいは文壇的な形式上の追認に過ぎません」(P67)と触れている。また、「作家にとって何よりも大事なものは「個人の資格」なのだということです。賞はあくまでその資格を側面から支える役を果たすべであって、作家がおこなってきた作業の成果でもなければ、報償でもありません。ましてや結論なんかじゃない」(P76-P77)と強く主張している。入賞可否を、「賞を取る取らないは作品の内容とは多くの場合、基本的に関わりを持たない問題」だし、それでいて世間にはけっこう刺激的な話題であるからで

airiti

す」(P76)と冷静に傍観している。

さらに、芥川賞については、「芥川賞というのはもともと文藝春秋という一出版社が主宰するひとつの賞に過ぎません。文藝春秋はそれを商売としてやっている。——ともで言わないけど、全く商売にしていないといえは嘘になります」(P65)と芥川賞の持つ商業的機能を指摘している。さらに敷衍し、何回も有力立候補として国内外で騒がれたが、結局入賞出来なかったノーベル文学賞についても、「芥川賞のみならず、世界中すべての文学賞が「どれだけの実質的価値がそこにあるのか?」という話になってしまいますし、そうなると話が前に進まなくなる。だって賞と名の付くもの、アカデミー賞からノーベル賞に至るまで、評価基準が数値に限定された特殊なものを除けば、その価値の客観的裏付けなんていうものはどこにもないからです。けちをつけようと思えば、いくらでもつけられる。ありがたがろうと思えば、いくらでもありがたがれる」(P65-P66)とノーベル賞の持つ評価基準に個人的疑念を出している。ちなみに、村上春樹の数多くの国内外の受賞歴²³には、芥川賞、ノーベル賞はまだ入っていない。

4.1.2 漱石の場合

文学賞ではないが、漱石は生涯で3回ほど表彰らしいもの関わっている。明治42年5月15日に発行された雑誌『太陽』第5月号(第15巻第7号)²⁴を貰った漱石が読んで、その雑誌が行った「名家投票」結果の所で、「文芸家という名の下に余の姓名が見えた」(「太陽雑誌募集名家投票に就て」P209)が、「遺憾ながら、余の平生の主

²³ 日本国内では、「群像新人賞」(1979)、「野間文芸新人賞」(1982)、「谷崎潤一郎賞」(1985)、「読売文学賞」(1996)、「桑原武夫学芸賞」(1999)、「朝日賞」(2006)、「日本早稲田大学坪内逍遙大賞」(2007)、「毎日出版文化賞」(2009)、「国際交流基金賞」(2012)、海外では「フランツ・カフカ賞」(2006)、「エルサレム賞」(2009)、「スペイン芸術文学勲章」(2009)、「カタルーニャ国際賞」(2011)などを受賞した。

²⁴ 日本近代文学館編(1999)『太陽総目次』八木書店 P514

airiti

義と反するから、折角の光栄を担いながら、その記念とも見るべき贈品を受ける事が出来ないのを残念に思ふのである。」（「太陽雑誌募集名家投票に就て」P211-212）と拒絶する意思を強く表明した。後、仲立ちに入ってもらった人に、「あんな事を書いて、投票には反対だが、金盃の方はもらおうと云うことになると、私の主意が立たないから」（「太陽雑誌募集名家投票に就て」P212）と言って謝絶した。漱石は「余の平生の主義」、「私の主意」を理由に断ったが、それは雑誌の売り上げを目当てに行った名家投票には、「道義問題」（「太陽雑誌募集名家投票に就て」P206）があるという主張であった。

また、明治45年3月に文芸委員会²⁵に予備選奨されたという知らせを受け取った時に、「甚だ困ったと思っていた所である」（「やっど安心」P959）と率直に感想を述べた。文中に博士号辞退、文芸委員会設置への反対、美術展覧会の賞状と違う獎金授与の3点を理由に受け取らないことにした漱石は後に、「選奨した品がなかったと聴いて先安心した」（「やっど安心」P959）。そして、文芸委員会設置に対する批判的な態度の一端は、「文展の審査員は政府といふ要らざる後楯を背負う点に於て不都合ではある」（「文展と芸術」P395-396）と、「具眼者として期待されつつある文展の審査員諸氏に向つて、たとい一人たりとも助かるべき筈の芸術的生命を、自己の粗忽と放漫と没鑑識とによつて殺さざらん事を切望して已まぬのである」（「文展と芸術」P398）からも窺われる。

上述の42年と45年の間に、有名な漱石の博士号辞退事件が明治44年2月から2ヶ月間続いた。その遣り取りについては、「文部大臣は授与を取り消さぬと云い、余は辞退を取り消さぬという丈であ

²⁵ 小田切秀雄監修・荒正人著(1984)『増補改訂漱石研究年表』集英社P712では、明治45年3月3日午後今回の選奨に関して無記名投票を行ったところ、「作品よりも人物に力点において、「文芸功勞者」として賞牌と獎金二千三百円を贈呈することとなる」とある。

る」（「博士問題の成行」P272）と漱石が見ている。この辞退のついでに、学問奨励を旨とした博士制度について「学問は少数の博士の専有物となって、僅かな学者的貴族が、学権を掌握し尽すに至ると共に、選に洩れたる他は全く一般から閑却される結果として、厭ふべき弊害の続出せん事を余は切に憂ふるものである」（「博士問題の成行」P273）と痛烈に批判し、「余の博士を辞退したのは徹底徹尾主義の問題である」（「博士問題の成行」P272）との信念を絶対に曲げなかった。博士制度を批判する一方、「余は此意味に於て仏蘭西にアカデミーのある事すらも快よく思つて居らぬ」（「博士問題の成行」P273）ともフランスで設けたフランスの国立学術団体のアカデミー・フランセーズ²⁶を批判のまゝに挙げている。ちなみに、村上春樹が2007年にベルギーのリエージュ大学から名誉博士号、2008年にアメリカのプリンストン大学から名誉文学博士号²⁷を授与されたという。漱石の信念との懸隔は一目瞭然であるが、国内での公的評価を十分に受けられない村上春樹が、海外での発展を目指したという方向の違いを考える必要があるであろう。

4.2 職業作家としての意識について

小説家を職業にした二人の本業への意識は下記の通りである。

4.2.1 村上春樹の場合

村上春樹は小説家を職業にしたことに対して、「僕はそのような書き方を可能にしてくれる、自分なりの固有のシステムを、長い歳月をかけてこしらえ、僕なりに丁寧に注意深く整備し、大事に維持してきました。汚れを拭き、油を差し、錆びつかないように気を配ってきました。そしてそのことについては一人の作家として、ささ

²⁶ 古川久編(1966・1975)「注解」『漱石全集』第11巻岩波書店P674

²⁷ 溝口めぐみ(2011)「村上春樹文学誕生の秘密」
http://www.library.pref.hyogo.jp/event/event2011/rikatsuyou_siryo201107.pdf(2016年2月25日閲覧)

airiti

やかではありますが誇りみたいなものを感じています」(P159)と誇りに思っている。回りからの批判が高まっている中、「実際にこうとしか書けないなんだから、こう書くしかないんじゃないか。それのどこがいけないんだ」と開き直っていました。今はたしかにまだ不完全かもしれないけど、そのうちにもっとちゃんとした、質の高い作品が書けるようになるだろう。またその頃になれば時代も変化を遂げているだろうし、僕のやってきたことは間違っていなかったと、しっかり証明されるはずだと信じていました」(P129-130)と小説創作に対する自負を持っている。なお、小説創作の根本については、「自分の心のあり方を映しだす自分なりの小説を書きたかった——ただそれだけです。(中略)書いている間は楽しかったし、自分が自由であるというナチュラルな感覚を持つことができました。(中略)そのような自由でナチュラルな感覚こそが、僕の書く小説の根本にあるものです。それが起動力になっています」(P101)とし、「そのような自由な心持ちを、その制約を持たない喜びを、多くの人々にできるだけ生のまま伝えたいという自然な欲求、衝動のもたらす結果なかたちに他ならないのです」(P101)と詳しく説明している。

作中人物の命名に関しては、村上春樹が自認したように、「登場人物に名前を与えることが長いあいだできませんでした」(P226)と述べ、「ただ人に名前をつけるのが、どうしても恥ずかしかったから」(P226)と理由を打ち明けている。

また、小説家が創作に臨む場合、「選り好みせずに、観察することが大事です」(P220)とし、「関わってくる人々の様子や言動を子細に観察することを心がけました。(中略)そういう体験は小説家である僕にとって少なからず滋養に満ちたものであったと、今では感じています」(P222)と小説創作の上で観察の持つ効力を肯定している。

4.2.2 漱石の場合

airiti

明治40年に「朝日新聞社員として、筆を執って読者に見えんとする余が入社の辞に次いで、余の文芸に関する所信の概要を述べて、余の立脚点と抱負とを明かにするは、社員たる余の天下公衆に対する義務だろうと信じる」（「文芸の哲学的基礎」P31）と一新聞社員の社会に果すべき責務をかなり意識して専業作家になった漱石は、明治41年に「世の中に存在する所の総ゆる職業は平等で、優劣などのある道理はない」（「文芸は男子一生の事業とするに足らざる乎」P627）と職業観を明らかにし、「もし文学者の職業が男子の一生の事業とするに足らぬと云うならば、政治家の職業も亦男子一生の事業とするに足らないとも言える」（「文芸は男子一生の事業とするに足らざる乎」P627）と公言している。さらに、明治44年に「職業というものは要するに人の為にするものだという事」（「道楽と職業」P312）と認識を深めている。実は、入社する前から既に「余の作物は余の予期以上に歓迎されて居る」（「作物の批評」P20）と自覚した漱石は、明治42年に「筆を執って文壇に衣食する以上は、余の如きものでも、相当の自信と抱負のあるのは勿論である。その自信あり抱負ある点に於ては敢て何人にも譲らぬ丈の覚悟は自惚にもせよ有している。」（「太陽雑誌募集名家投票に就て」P211）と、職業としての小説家への自信と抱負を持ち、それを誇りに思っている。職業とした小説家に対して持つ自信、自負、誇りは、村上春樹と同様である。ただし、「社員たる余の天下公衆に対する義務」（「文芸の哲学的基礎」P31）を職業とした小説家になってから、常に強く意識していた漱石とは対照的に、「作家としての社会的責任の放棄」（P73）をよく批判された村上春樹は、その批判に対して「少しでも質の高い作品を書き続け、読者に提供すること」（P74）を作家にとって何より大事な責務と見て、それこそ社会的責任だと解釈している。社会責任をめぐる両者の言説は、漱石が新聞という当時の新しい権威から認め

airiti

られたのに対して、村上春樹が日本社会の国立大学や文壇という権威から疎外されてきたという、その社会への関係性によって生じた相違だとも見られよう。

さらに、創作については、「芸術は自己の表現に始って、自己の表現に終るものである」（「文展と芸術」P389）と言い、「徹頭徹尾自己と終始し得ない芸術は自己に取って空虚な芸術である」（「文展と芸術」P391）と規定している。なお、創作に熱中した時の様子を「仏来れば仏を殺し、祖来れば祖を殺すというのは正に此時の気概である。（中略）殆ど絶対の境に入ったものである」（「文展と芸術」P396）と触れている。自分の創作に当てはめると、「白熱度に製作活動の烈な時には、自分は即ち作物で、作物は即ち自分である。従って二つのものは全くの同体に過ぎない。然し其活動が始終を告げると共に、自分は自分とはっきり分かれて来る。外の言葉で云い現わすと、此時自分は始めて一步作物から遠退くのである。始めて作物に対して客観的態度が取れるようになるのである。要するに始めて一步でも他人らしくなれるのである。既に他人として、幾分でもわが製作に対する批判が起る以上は、しかも其批判がわが製作の存在上必要である以上は、自己対製作なる彼我の関係を、（己れを信ずる）具眼者対製作の關係に拡大するのは已を得ざる自然の順序である」（「文展と芸術」P397-398）と詳論している。前述の村上春樹が言った「自分の心のあり方を映しだす自分なりの小説を書きたかった——ただそれだけです」は、漱石がここで言った「自分は即ち作物で、作物は即ち自分である」とは、大した相違はなかろう。

作中人物の命名については、「小説中の人物の名は、却々うまく附けられないものだ。場合によると、あれもいかぬ、之れもいかぬで、二日も三日も考えてみることもあるが、凝って思案に能わぬで、大抵はいい加減に付けて了う」（「小説中の人名」P624）と告白してい

airiti

る。村上春樹も漱石も作中人物の命名に苦手だという点では共通している。共通点は、これだけではなく、小説家になるために、観察が役立つというアドバイスも、両者では相通じる所がある。漱石が「人事に関する文章は此視察の表現である」（「写生文」P22）とし、「平生心がけて世の中を、明瞭に見ると云うことが文章家に必要であるまか。我輩が今物を書いて思ひ当るが、そう云う風に養成せられて居たら、今頃は余り程巧くなったと思われる。文章軌範だとか源平盛衰記の様な物許りが文章だと思っていたから、直接に自然に触れて観察しない。実は目前にあるつまらない器物も悉く材料であったのである」（「現時の小説及び文章に付て」P465-466）。それは正に村上春樹が心がけていた「関わってくる人々の様子や言動を子細に観察すること」（P222）の効力を肯定している通りである。

4.3 読者について

職業作家を選んだ両者が読者をどのように見て、考えているかを見てみよう。

4.3.1 村上春樹の場合

「いろんな年代の人に読まれている」（P256）ことを嬉しく思い、「デビューして以来一貫して読者には恵まれていたなど、しみじみ感じてい」（P263）る職業作家の村上春樹は読者を見る場合、「何より大事なのは良き読者です。どのような文学賞も、勲章も、好意的な書評も、僕の本を身銭を切って買ってくれる読者に比べれば、実質的な意味を持ちません」（P68）とし、「そういう読者のみなさんに対しては、僕は心から本当にありがたいと思ってい」る村上春樹は、「作品について判断を下すのは言うまでもなく読者一人ひとりです」（P159）と読者の存在を重要視している。そして、読者にして「僕の本を読んでくれる読者にも、それと同じ心持ちを味わっていただきたい。人々の心の壁に新しい窓を開け、そこに新鮮な空気を吹き込

airiti

んでみたい。それが小説を書きながら常に僕の考えていることであり、希望していることです」(P105)とし、「自分が書いていて楽しければ、それを同じように楽しんで読んでくれる読者だってきっとどこかにいるに違いない。その数はそれほど多くはないかもしれない。でもそれでいいじゃないか。その人たちがうまく深く気持ちが通じ合えたとしたら、それでとりあえずは十分だろう、と。」(P244-P245)と読者への共感を求めている。さらに、創作する際、常に「架空の読者」(P254)、あるいはそれに相通じる「総体としての読者」(P260)を念頭に置き、読者と「繋がっていると感じ取ることができます。養分が行き来している実感があります」(P255)ということになる。なお、「著者と読者の間のナチュラルな、自然発生的な「信頼の感覚」(P265)と読者の間に築いたと村上春樹が確信した。要するには、評論家とは決してよい関係に置くことが出来ない反面に、大事にしたい読者との間に築いた「信頼の感覚」(P265)は、村上春樹にとって何よりもの慰めであろう。

4.3.2 漱石の場合

「若し我々が小説を書いて実際の世の中を見るような心を読者に起さしめんと勉むるには、小説中の事件が自然にして、自分の性格が又自然に発展すべきは勿論、同時に又背景を描くことも必要である」(「文学談片」P496)という漱石は「写す文章家も泣くから、読者は泣かねばならん仕儀となる。泣かなければ失敗の作となる」(「写生文」P23)と読者に感受性を求めている。一方、「読者は無論の事、色々な種類のものを手に応じて賞翫する趣味を養成せねば損であろう」(「写生文」P27)と読者の成長を要請している。これは、日頃「文学もまた趣味の教育であり」(「家庭と文学」P560)、「本来文学なるものは、趣味の向上ということ以外に目的を有たぬ」(「家庭と文学」P560)との漱石の主張と軌を一つにしている。なお、「作

airiti

品としては自然と出来上ったもので、故とらしく教訓を狙って書いたものではないが、自然と出来上った其作品の中に於て、余は如上の教訓を認め得たと云うなれば、私は作家として満足である」（「予の描かんと欲する作品」P656）と述べた漱石は読者を教育する、いわば啓蒙者のような役割を職業作家活動を通して全うする意図を持っていたと言えよう。

このように、村上春樹が読者に作品への共感による絆、信頼感を抱いているのに対して、漱石は読者に作品への共感以外に、更なる読者の趣味の向上を期待している。どちらかと言えば、漱石は上から読者を見る目線で接しているのに対して、村上春樹は同列に立つ読者の温もりを求めているのである。当然ながら、近代化の途上だった明治と成熟した市民社会を迎えた昭和後期・平成という時代的背景の差異が、この「二人の国民作家」の読者観に反映しているであろう。

5. おわりに

以上のように、職業作家の視点から「二人の国民作家」の漱石と村上春樹が行った創作活動を比較してみた。主に評論家・評論、講演活動、文学賞、職業作家としての意識、読者の5点に分けて結論を纏めることが出来た。

評論家・評論、講演活動の2点では、漱石は最初、村上春樹とあまり変わらない消極的態度を採っていたが、朝日新聞社入社後、「朝日文芸欄」の編集担当という社会的境遇の変化に応じ、評論家・評論、講演活動を積極的に行うように変わった。また文学賞などの権威主義を盾にしたシンボルを、漱石は断じて拒絶する姿勢を見せた。一方、村上春樹は文学賞よりも読書・執筆の方が大事だという論調を広げながら、受賞歴にない芥川賞についてはビジネス的性格、ノ

airiti

ーベル賞については明確な基準がないことを指摘している。職業作家としての意識、読者の2点については、多少相通じた点が見られる。作中人物の命名、観察することの大切さ、読者から共感を求めることなども一致している。ただし、読者への目線の位置の違いからは、漱石と村上春樹の両者が生きた時代の相違を覗くことが出来る。

このように、1949年の戦後に生まれた村上春樹は1979年に処女作『風の歌を聴け』を発表後、35年以上小説創作を続けている。一方、1867年の明治維新の幕開けに生まれた漱石は大学講師を辞職して朝日新聞社の専属小説家になり、僅か10年間の小説創作ではあったが、日本の文学史上、永遠に輝く栄光として褒め称えられる作品を残した。この「二人の国民作家」が生きている時代が違っているからこそ、それぞれの時代を生きている読者を数多く獲得し、影響を与えている。時代の懸隔があったにせよ、多少社会と関わった意識の強弱度の違いがあったにせよ、時代の枠を超えて職業作家としての意識は、偶然にも一致している点が多い。そこから漱石文学を自分の永遠なる憧れにし、愛慕しつつある村上春樹の姿が見られる。2015年6月に日本の文部科学省が国立大学に出した人文社会科学系学部の廃止の通知が日本社会で引き起こした激しい喧騒の中、却って漱石が明治44年に叫んだ「文学と教育とは決して離れないものであるのであります」（「教育と文芸」P399）という言葉が意味深長に聞こえ、また時代を超えて相輝き、響きあう日本の「二人の国民作家」の文学創作を通して、人間として生を享けた有難さ、高貴が一層清らかに気高く見られよう。

airiti

テキスト

- (1966・1975)『漱石全集』第11巻岩波書店
(1967・1976)『漱石全集』第16巻岩波書店
村上春樹(2015)『職業としての小説家』スイッチ・パブリッシング

参考文献

- 古川久編(1966・1975)「注解」『漱石全集』第11巻岩波書店
小宮豊隆(1966・1975)「解説」『漱石全集』第11巻岩波書店
(1966・1976)『漱石全集』第14巻岩波書店
相原和邦(1980)「文学論・文芸の哲学的基礎・作家の態度」竹盛天雄編
別冊国文学『夏目漱石必携』N05 学燈社
小田切秀雄監修・荒正人著(1984)『増補改訂漱石研究年表』集英社
遠藤祐(1994)「朝日文芸欄の主宰」『朝日新聞記者夏目漱石』立風書店
熊坂敦子(1994)「編集者漱石の感覚——朝日新聞を中心に」『朝日新聞記者夏目漱石』立風書店
日本近代文学館編(1999)『太陽総目次』八木書店
佐藤泰正(2001)「村上春樹と漱石—〈漱石の主題〉を軸として」『日本文学研究』36号梅光女学院大学文学部
(2004)特別版増刊『夏目漱石と明治日本文芸春秋』第82巻第16号文芸春秋
吉本隆明(2004)「漱石の巨きさ」特別版増刊『夏目漱石と明治日本文芸春秋』第82巻第16号文芸春秋
山田有策(2004)「文体の魔術師」特別版増刊『夏目漱石と明治日本文芸春秋』第82巻第16号文芸春秋
山根由美恵(2007)「『螢』に見る三角関係の構図—村上春樹の対漱石意識」『国文学攷』195号広島大学国語国文学会
半田淳子(2007)『村上春樹、夏目漱石と出会う—日本のモダン・ポストモダン』若草書房
小森陽一、ルービン・ジェイ(2010)「対談『1Q84』と漱石をつなぐもの」『群像』65巻7号講談社
(2010)「特集 村上春樹ロングインタビュー」『考える人』N033 新潮社
柴田勝二(2011)『村上春樹と夏目漱石—二人の国民作家が描いた<日本>』祥伝社
曾秋桂(2012)「『1Q84』における記憶再生の装置—漱石の『三四郎』を原型として—」『台湾日本語文学学会学報』32号台湾日本語文学会
北村隆志(2014)「村上春樹『女のいない男たち』と夏目漱石」『民主文学』日本民主主義文学会11号
ジェイ・ルービン(2015)「村上春樹から小説『日々の光』まで」曾秋桂編『淡江大学村上春樹研究中心成立周年記念演講會議手冊』淡江大学村上春樹研究中心
曾秋桂(2015)「村上春樹の男嫉妬物語「木野」の蛇の持つ「両義性」—重層物語世界の構築へ向けて—」『台湾日本語文学報』38号台湾日本語文学会
曾秋桂(2016)「男の嫉妬物語を視点に見た夏目漱石と村上春樹—「木野」における「両義性」から示唆されつつ—」森正人監修小森陽一・曾秋桂編『村上春樹研究叢書村上春樹における両義性』第三輯淡江大学出版中心

airiti

インターネット資料

<http://paper.wenweipo.com/2008/11/17/OT0811170005.htm>「葉蕙によるインタビュー」2008年10月29日(2015年5月16日閲覧)
<http://www.douban.com/group/topic/37861034>「村上春樹 公開インタビュー in 京都」2013年5月6日(2015年5月16日閲覧)、
<http://www.wellneednt.com>「村上さんのところ」(2015年5月16日閲覧)
溝口めぐみ(2011)「村上春樹文学誕生の秘密」
http://www.library.pref.hyogo.jp/event/event2011/rikatsuyou_siry_o201107.pdf(2016年2月25日閲覧)

References

- Aihara,K.(1980)*Bungakuron, bungei no tetsugakutekikiso, sousakuka no taido*. Takemori,T.(Eds.)*Bessatsukokubungaku, Natsume soseki hikkei*.NO5, Gakutosha,Japan.
- Bungeishunju(2004)*Tokubetsuzokan “Natsume soseki to meiji bungeishunju*, 82-16, Bungeishunju, Japan.
- Endo,Y.(1994)*Asahibungeiran no syusai. Asahishinbun kisha natsume soseki*. Tachikaze shobo, Japan.
- Handa,J.(2007)*Murakami Haruki, Natsume soseki to deau; Nihon no modan, posuto modan*. Wakakusa shobo, Japna.
- Jay,R.(2015)*Murakami Haruki kara shosetsu”hibi no hikari”made*. So,S.(Eds.)*Tankoudaigaku murakamiharuki kenkyuchushin seiritsu shunen kinenkouen kaigishusatsu*. Tankou daigaku murakami Haruki kenkyu senta, Taiwan.
- Kitamura,T.(2014)*Murakami Haruki”Onna no inai otokotachi”to natsume soseki*. *Minshubungaku*,11, Japan.
- Komori,Y.&Jay,Rubin(2010)*Taidan “1Q84” to soseki wo tsunagu mono*. *Gunzo*,65-7, Kodansha, Japan.
- Kumasaka,A.(1994)*Henshusha soseki no kankaku; Asahishinbun wo chushinni. Asahi shinbun kisha Natsume soseki*. Tachikaza shoten, Japan.
- Nihonbungakukan(Eds.)(1999)*Taiyo so mokuji*. Yagishoten, Japan.

airiti

- Odagiri,H.(Eds.)Ara,M.(1984)*Zoho kaitei sosekikenkyu nenpyo*.
Shueisha, Japan.
- Sato,Y.(2001)Murakami Haruki to soseki;”Sosekiteki shudai wo
jikutoshite. *Nihonbungaku kenkyu*,36, Japan
- Shibata,S.(2011)*Murakami Haruki to natsume soseki; Futari no
kokuminsakka ga egaita “nihon”*. Shodensha, Japan.
- Shinchosha(2010)*Tokushu Murakami Haruki rongu intabyu*. Kangaeru
hito, NO33, Shinchosha, Japan.
- So,S.(2012)”IQ84”niokeru kiokusaisei no souchi; Soseki no “Sanshiro”
wo genkeitoshite. *Taiwan Nihongo bungakukaihou*,32, Taiwan.
- So,S.(2015)Murakami Haruki no otoko shitto monogatari”kino”nomotsu
“ryogisei”; Jyuso monogatari sekai no kochiku e mukete. *Taiwan
Nihongo bungakukaihou*,38, Taiwan.
- So,S.(2016)Otoko no shitto monogatari wo shiteni mita natsume soseki
to murakami Haruki;”Kino”niokeru”ryogisei”kara shisasaretsutsu.
Mori,M.Komori,Y.&So.S. (Eds.)*Murakami Haruki kenkyu sosho;
Murakami Haruki niokeru ryogisei*, NO.3, Tankoudaigaku shuppan
chushin, Taiwan.
- Yamada,Y.(2004)Buntai no majyutsushi. *Tokubetsuzokan “Natsume
soseki to meiji bungeishunjyu*, 82-16, Bungeishunjyu, Japan.
- Yamane,Y.(2007)”Hotaru”ni miru sankakukankei no kozu; Murakami
Haruki no tai soski ishiki. *Kokubungakukou*,195, Japan.
- Yoshimoto,T.(2004)Soseki no okisa. *Tokubetsuzokan “Natsume soseki to
meiji bungeishunjyu*, 82-16, Bungeishunjyu, Japan.

※2016年9月21日原稿受領 2016年10月3日審査通過